

最優秀賞

テーマ1..医療と福祉、わたしの体験
「とうもろこしのバトン」

山梨県・山梨英和高等学校2年 若林風歌

祖父が左半身麻痺になって十年が経つ。私が小学二年生の冬、祖父が脑梗塞で倒れた。病に倒れた母方の祖父は普段から同居していたわけではないが、長期休みの時などに訪ねて行くと、丸い顔をくしゃくしゃにして、いつも元気に出迎えてくれた。そして、毎日早朝から農作業に出かけては収穫してきた新鮮な野菜を、

「爺ちゃんが育てたんだぞ。栄養あるから食へるよ。」

と、私にくれた。特に祖父が育てたとうもろこしは、茹でて食べると格別に甘くて美味しくて、シャキシャキとした噛みごたえのある歯ごたえと、瑞々しくはじけるように元気な黄色が、まるでそのまま、いつも元気で張りのある祖父のようだったと思ったものだ。そんな祖父が、病院のベッドで弱々しい目でただ天井を見つめている様子を見たとき、ぐっと思が詰まり、声を出すことすらできなかつた。私は幼いながらに、活力ある人間から、一瞬で日常を奪ってしまう「病气」というものの残酷さを痛感し、「お爺ちゃんは歩いたり自分で食事をしたりすることが、もう一生できないままなのかもしれない。もう笑顔を見ることができないかもしれない。」と、暗く悲しい気持ちで胸が一杯になったのを覚えている。そんなとうもろこしもない気持ちでいたときだ、

「よく来たな。」

祖父が私を見て言ったのだ。私はやっと声を出すことができた。急に涙も込み上げてきて、泣きながら母に尋ねた。

「お爺ちゃん話せるの?」

私の母は社会福祉士で、介護の資格も持っている。そんな母が教えてくれた。左半身麻痺になったので、右手右足は使うことができるし、食事も右手でできる。そして話すこともできるというのだ。私は驚き、

とてもほっとした。

けれど、そう思ったのも束の間、それからというもの、本当に大変なリハビリ生活が始まった。

脑梗塞で倒れた祖父のおかげで、私は医療や福祉には様々な役割の人達が居ることを初めて知った。病気を診てくれるお医者さん、看護してくれる看護師さん、リハビリに携わる理学療法士さんや作業療法士さん、言語聴覚士さん、病院から家へ帰ることを前提に相談に乗ってくださる病院のソーシャルワーカーさん、介護支援専門員さん、又、帰宅してからは更に、デイサービスの職員さんやホームヘルパーさん、福祉用具の貸し出しをしてくださる業者さんなど、祖父の周りには驚くほど多くの人達が繋がったチームが結成されたのだ。チーム名はたぶん「チーム幸正」だ。(幸正は祖父の名前)

しばらくすると、チーム幸正のおかげで、祖父は杖をついて歩けるようになり、週に何日かは「デイサービス」へ行き、楽しみも見つけられるようになった。けれど祖父が笑顔を取り戻すことができた背景には、実はもう一つのチーム幸正が存在していたのだ。それは祖父の意思を繋ぐ人達で構成されたチームだ。祖父が長い闘病生活を明けて家に帰ったとき、祖父はかつて元気に暮らしていた家を見て泣いた。自分が大切にしていた畑の様子を見て泣いた。嬉し泣きにおいおいと声を上げて泣いたのだ。なぜなら何も変わっていなかったから。近所の方々や祖父の旧友の方、親戚の叔父さんや叔母さん達が協力して、年を越して新しい種を撒き、草の管理をして、大事に育ててくれた野菜が、祖父が倒れる前と全く同じように、そこにたわわに実っていたからだ。実はそれには介護支援専門員さんや、自宅で訪問リハビリを行うために来る理学療法士さん達からのアドバイスがあったのだそう。病は気からと言うが、本当だと思う。二つのチーム幸正は、協力して祖父の生きる気力を高めてくれたのだ。

今年の夏も、祖父が、訪ねてくる人達に笑顔でとうもろこしを振る舞っている。

「よく来たな。栄養あるから食へるよ。美味しいぞー。なんてたって、みんなで育てたんだからなあー!」